

『宇津保物語』巻一「俊蔭」

(隠れ住んでいた母子は、子供が五歳のとき、いままで面倒を見てくれていた元召使の老女が、死んでしまったので、食料が得られなくなった。)

(子供は)朝早く、近くの河原に出てぶらぶらと遊んでいると、釣をする人が、魚を釣っている。(子供が釣人に)、
「(これは)何にしようとしているのですか」と訊くと、(釣人が)言うには「親が病気で、何も食べないので、(魚を釣って親に)あげようとしているのだ」と言うので、

(子供は)「それでは、親には、これ(魚)を食べさせるものなのだ」とわかって、釣り針を用意して釣っていると、たいそう美しい子供が、大みな川のほとりに出て(魚を)釣っているのだ

(人々は)「このようなかわいらしい子供を、このように出歩かせているのは(そんな親は)、誰だろう」と思って、「何のために、このように(釣りを)しているの?」と訊くので、(子供は)「遊びでやっているのです」と言う。

(人々は)かわいいと思って「私が釣ってあげよう」と言って、たくさん釣って(魚を)くれる人もいるので、持って帰って、母親に食べさせなどし続けたので、(母は)「このようにしてはなりません。(私は)何も食べなくても、苦しくありません」と言うが、(子供は)聞きいれない。容貌は日ましに光るように(美しく)なっていく。

見る人は、(彼を)抱いてかわいがり、「親はいるの? さあ、私の子に(なりなさい)」と言うので、(子供は)「いいえ、お母様はいらっしゃいます」と言って、ちっとも承諾しない。

季節が暖かいうちは、このように(釣りを)し続けて、母に(魚を)食べさせる。(母は)ほんのわずかでも、すべてこの子の食べさせる物ばかりで生きていた。

冬が来て寒くなるにつれて、(川が凍るので、魚も釣れず)そうもできなないので、この子は「私の母に何をさしあげようか。どうしよう」と思って、母に言うには、「魚を取りに行きたいのですが、(水面に張った)氷がたいそう固くて、魚も手に入らないのです。お母様、どうなさいますか?」と言って、泣くので、母は「なにが悲しいのですか。泣くではありません。氷が解けたときに取ればいいでしょう。私はもうたくさん食べましたよ」と言ったが、

それでも(子供は)夜が明ければ、河原に行くと、人が多く、牛車などがある時は、その時をやり過ぎて、(人や車のないときに)出て見ると、川の水は、鏡のように凍っている。

そのとき、この子が言うには「本当に、私が孝子(孝行息子)であるならば、氷がとけて魚よ出て来い。孝子でなければ、出て来るな」と言って、泣く時、氷が解けて大きな魚が出て来た。

取って帰って、母に言うには、「私は本当に孝子でしたよ」と(その奇跡を)語った。

小さい子供が深い雪をかきわけて、足手はエビのように(寒さで赤くなりかじかんでいて)、走って来るのを(母が)見につけて、たいそう悲しくて、涙を流して「どうして、このように寒いのに、出て歩いているの? こんなふうでない時に歩きなさい」と泣くので、(子供は)「つらくなんかありません。母上のことを思うので」と言って、止めようとしもない。さきほど得た魚は、魚のように見えたが、(食べてみると)百種の味をそなえた飲食物になった。不思議なすばらしい事が多かった。